

▼東京都

2月27日院内集会「復興計画・防災計画にどのように男女共同参画・多様性の視点を盛り込むべきか」報告

東日本大震災女性支援ネットワークは、2月27日（月）院内集会「復興計画・防災計画にどのように男女共同参画・多様性の視点を盛り込むべきか」を開催しました。

この集会では、国の「防災基本計画」の分析や自治体の防災計画の先進事例の紹介、被災地で今後求められる支援、防災計画や支援の評価指標における国際基準などをふまえながら、復興計画・防災計画における男女共同参画・多様性をどう盛り込むべきかの問題提起を行いました。

国内外の災害支援・復興、女性の人権を守るための支援活動などに関わる団体や個人など、100名を超える参加がありました。また、多くの議員の方々も駆けつけて下さいました。

東日本大震災女性支援ネットワークは今までの活動からまとめた「復興計画・復興政策に組み込むべき提言」を発表。会場からは、様々な立場からの政策提言に加えるべき意見が寄せられました。

この院内集会で発表された資料、及び全動画は、Webサイトの下記のページからご覧になれます。



<http://risetogether.jp/?p=1100>

<資料>

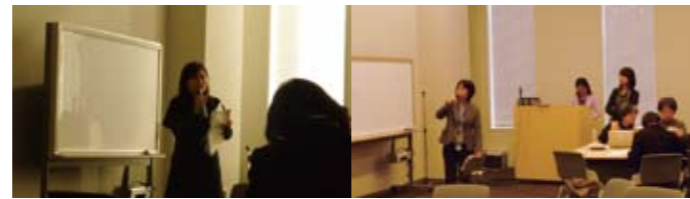
- ・国・自治体の防災計画への提言
浅野幸子（早稲田大学非常勤講師）
- ・女性と多様なニーズに配慮した災害支援アイデア集紹介
田中雅子（文京学院大学准教授）
- ・防災・復興の計画・評価に国際基準を取り入れる
池田恵子（静岡大学教授）
- ・ネットワークの政策提言活動
「復興計画・復興政策に組み込むべき提言」

<動画>

<http://risetogether.jp/?p=1319>



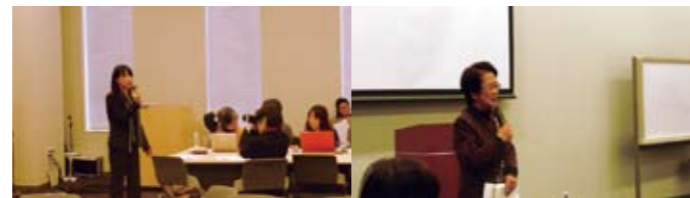
林久美子参議院議員（民主党） 福島みずほ参議院議員（社民党）



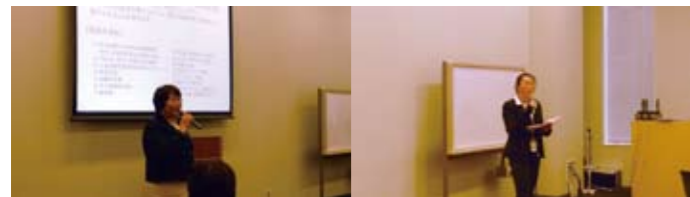
「地方防災計画への提言」を行った浅野幸子さん（早稲田大学 非常勤講師） 「防災・復興の計画・評価に国際基準を取り入れる」を担当した池田恵子さん（静岡大学教授）



岡崎トミ子参議院議員（民主党） 大河原まさこ参議院議員（民主党）



東日本大震災女性支援ネットワーク・閉会の挨拶 中島明子さん（東日本大震災コーディネーター 齋藤文栄さんは、震災女性支援ネットワーク共同代表・ネットワークからの政策提言を発表 和洋女子大学教授）



高橋千鶴子衆議院議員（共産党） 弁護士鈴木ふみさんは、義援金の扱いについて提言



みやぎジョネット（みやぎ女性復興支援ネットワーク）草野祐子さんは、仙台から参加 DPI 女性障害者ネットワークの白井久実さんは、障害者に対する避難所運営について提言

連絡先

東日本大震災女性支援ネットワーク

住所：東京都文京区向丘 1-7-8

TEL/FAX：03-3830-5285

E-mail：office@risetogether.jp.org

Web：http://www.risetogether.jp.org

twitter：@risetogetherjp

●メールマガジンをご希望の方は事務局までメールかお電話でお申し込み下さい。



東日本大震災女性支援ネットワーク
Rise Together :
Women's Network for East Japan Disaster

<http://www.risetogetherjp.org>

Oxfam 協力：国際協力 NGO オックスファム
URL：www.oxfam.jp

かだりば通信 2012.3

発行：東日本大震災女性支援ネットワーク／編集人：岡本美架
〒113-0023 東京都文京区向丘 1-7-8 TEL：03-3830-5285 E-mail：office@risetogetherjp.org twitter：@risetogetherjp

▼福島～全国

心のこもった手作り手芸で被災地に Happy を送る

●ちくたくはあと 代表 大北千明



昨年 7/31 福島県相馬市大野台第二仮設住宅 集会所でのカフェ併設手芸ワークショップ

東日本大震災 3月11日、私は福島県相馬市にいました。家から車で10分の場所まで津波が押し寄せ、被災した大勢の市民と、変わり果てた沿岸部の町を目の当たりにし、さらに原発事故により沢山の友人がふるさとを失いました。次々に届く訃報。中にはまだまだ幼い命もあり、泣き崩れる母親の声も……。あるとき、はっとしました。

『亡くなった沢山の犠牲者は、きっと生き残った大切な人を助けてあげたいのではないかと。今もなんとかしてあげたくてどこからか見ているんじゃないか。』

そう考えたとき、ただ怯えているだけの自分が情けなくなりました。

インターネットで呼びかけてみると、家庭の事情で現地には行けない。なにかしたいけれど何をしたらいいのか分からないという女性と多く出会いました。趣味だったハンドメイドを中心に、心のこもった手づくりの髪かざりを80名以上の全国の

メンバーから合計3000個にもなる数を送っていただき、避難所等へ。1人1人の小さな力が、避難所の殺伐とした空気を、女子ならではの歓声で盛り上げる事に成功しました。その後は『ちくたくはあと』と活動名を付け、現在は手芸品の寄付を全国から募り、個人で避難所や仮設住宅で手芸ワークショップを開催。そして、チャリティ作品の販売や被災地作品の販売に尽力してくれる良きパートナーにも出会い、各所でイベントを開催出来るまでとなりました。

今日に至るまで、沢山の皆さんに出会い、そして支えられてきました。ただの主婦である私は、全国の皆さんの想いと、被災地を繋いだけにすぎません。精力的に支援活動をなさっている団体や行政の方々に比べれば、小さな活動ではありますが、『ちくたくはあと』は女性ならではの視点で、これからも被災地の状況とニーズに合わせ、『みんなで力を合わせれば出来るhappyになれる事』を探して行きたいと思います。

■福島県内を中心に仮設住宅での手芸ワークショップ等を不定期に開催中。

被災地等で作られた作品は神奈川県川崎市市のフリマボックス川崎にて常時販売中。今後の企画、手芸用品や作品等の募集についてはHPをご覧ください。
<http://ameblo.jp/hisaic-hi-jiritsu-ouen/>
連絡先：
handmadesinsaifukkou
@yahoo.co.jp
2/3～2/5 With You さいたまフェスティバルでの出店被災地作品、チャリティ作品の販売、相馬市の津波被害写真同時展示



CONTENTS

- p.2 ▼岩手県盛岡市 被災女性とシングルマザーのための「お茶っこサロン」
- p.2 ▼東京都西東京市 東日本大震災による避難移住者交流会一市と協働で「東北のみんなで話そう会 明日へ向かって！」開催
- p.3 ▼埼玉県所沢市 <女性からの政策提言講座>「女性たちよ、この社会の羅針盤になろう！ -男女共同参画の視点から地域の災害・防災への政策提言-
- p.3 ▼宮城県南三陸町 <被災地の女性の声> 前向きに・・・
- p.4 ▼東京都 2月27日院内集会「復興計画・防災計画にどのように男女共同参画・多様性の視点を盛り込むべきか」報告

▼岩手県盛岡市

被災女性とシングルマザーのための「お茶っこサロン」

●NPO 法人インクルいわて 石田愛

2月20日、盛岡市にて「東日本大震災で被災した女性とシングルマザーのためのお茶っこサロン」を開催しました。約40名の参加者の皆さんはハンドマッサージコーナーで癒しのひとときを過ごし、お茶っこコーナーでコーヒーを飲みながら交流を深めました。あつという間に超満員となったお茶っこコーナーは、赤ちゃんから70代までがにぎやかにどう、世代間交流の場となりました。

沿岸部から避難してきている方、原発事故の影響で福島から避難してきている方、震災の影響を受けたシングルマザーの方などたくさんの方にいらしていただきましたが、参加者の多くは盛岡市近郊の民間借り上げ住宅や親類宅に身を寄せて生活を送っている方々です。こう書いている私も福島から避難してきている一人です。

岩手県の内陸部には仮設住宅がありません。そのため情報や支援の手が届きにくいのが現状で、どうやって「つながる」かが大きな課題となっています。参加者の方の言葉をお借りすれば「民間借り上げ住宅での生活は、まるで普段どおり」に見えるので、被災したかどうかを外からうかがい知ることはできません。報道されているような復興ムードとは裏腹に、被災地か

ら遠く離れたこの内陸の地で被災者は孤立を深めているのです。

いつまで続くかわからない避難生活、故郷を離れてしまった後ろめたい気持ち。どこから避難してきたかにかかわらず、参加者の皆さんの悩みは共通していました。

お国訛りで話せる相手に出会えること、情報交換ができること。こういったことが難しい内陸部だからこそ、気持ちを分かち合い時には涙を流せるような場がまだまだ必要なのだと感じています。少しずつでもみなさんの気持ちが前に向かいますように、またみなさんと再会できますようにと願いながら、次のお茶っこサロンの準備を始めています。

■NPO法人インクルいわて：盛岡市の司法書士や助産師らが今年1月に設立。東日本大震災で一人親になった人たち、避難生活で離れられた家庭の就労や生活の支援を行なっています。
連絡先：080(2827)3213



▼東京都西東京市

東日本大震災による避難移住者交流会―市と協働で「東北のみんなでお話そう会 明日へ向かって！」開催

●NPO 法人生活企画ジェフリー理事長 渡辺美恵

東日本大震災により西東京市にも40数世帯、約160人の方々が避難移住されていますが、行政には「私の住んでいた〇〇町からここにきている方いますか？どこに？名前は何？」という問い合わせが多くありました。電話に出た職員は皆、心細いお気持ちを察しつつも個人情報保護法が壁になり、避難者のお力になれないもどかしさを感じていたそうです。

そこで、西東京市とNPO法人生活企画ジェフリーは協働で、避難者同士が顔を合わせ、情報を交流できる安心の場づくり、「第1回 東北のみんなでお話そう会」を開催しました(2011年8月)。参加者からは、「生きる力をもらった」「なにより故郷の人が身近にいることがわかってうれしい」「福島の訛りを

聞けてほっとした」「日頃のなにをいいかわからない自分を忘れて楽しい話ができ」等々の感想をいただき、改めて避難の日々の過酷さを痛感させられ、第2回の交流会(2012年1月)を企画しました。

第2回は趣向を凝らし、①避難者の方々に呼びかけ当事者参加の「準備会」や、②東北に関わった市職員の同席、加えて、③紙ベースのまち情報を豊富に提示したり、④市民交響楽団や市内在住アーティストの出演等行いました。参加延べ人数45名でした。

第1回目の8月には、暗く、不安で、落ち着かない表情が多く気になっていましたが、半年後の第2回目は、明るく、腰を据え覚悟を決めたかのような落ち着き感が漂っていたことに少しほっとしました。しかし、「普通の暮らしをすることはできない」「都営住宅への移転がまだ決まらない」「経済的に苦しい」等課題は残ったまま。「また参加したい」という声に秘められた絆をどう紡いでいったらいいのか、考えつつ、これからも支援は続けていきたいと思えます。

<http://www11.plala.or.jp/seikatukikaku-gf/>



▼埼玉県所沢市

〈女性からの政策提言講座〉「女性たちよ、この社会の羅針盤になろう！―男女共同参画の視点から地域の災害・防災への政策提言―」

●グループまあるい 安田和代

〈女性からの政策提言講座〉は、市町村の審議会など様々な場で政策提言できる女性の発掘と育成を目的とし、講座開催業務を民間団体に委託するという埼玉県初の事業で、私たちグループまあるいが、『「災害・復興と男女共同参画の視点」をテーマに政策提言の力をつける』という企画を提出し、受託することになりました。東日本大震災、福島東京電力原発事故で日常生活、社会が大きく揺れる中、きちんと声を上げてこなかったことへの悔恨と憤りが、委託事業応募への原動力でした。

県内3箇所(所沢、熊谷、越谷)、各3回の講座(前半はレクチャー、後半はグループワーク)と2月3日に成果発表会を行う本講座に、各会場20名前後の参加がありました。第1回目と2回目のレクチャーは、各会場共通で、第1回「災害・復興行政と男女共同参画政策」(皆川満寿美さん)、第2回「平和といのち一人間の安全保障」(高里鈴代さん)、第3回目は所沢会場「女性とメディア」(竹信三恵子さん)、熊谷会場「地方自治と男女共同参画」(堂本暁子さん)、越谷会場「女性と人権」(伊藤和子さん)と開催しました。後半のグループワークでは、3.11被災の体験から地域の課題を抽出し、課題解決から政策提言を考えるグループワークを進めました。

3会場3回ずつの講座、決して十分な時間とは言えないなか、グループごとに「政策提言」をまとめ、発表できたことは、大きな喜びです。

各グループからの政策提言をまとめ、埼玉県知事宛に提出します。まだ始まりに過ぎませんが、地域の主役である女性たちが、各自自治体の防災計画の見直しが始まっている今、さらに声をあげていくことを期待しています。

「ただ聞いているだけと気軽に受講しましたが、今の切迫した日本の状況の中、もっと私たちも政策提言できる実力をつけるべきだと強く感じ、できる限り勉強し直しました。さらに学び行動する覚悟を決めました。」(受講生感想から)

<http://maaruii.exblog.jp/>



▼宮城県南三陸町

〈被災地の女性の声〉 前向きに・・・

●南三陸町 及川まき

私の実家は民宿をしています。震災で被害もなく、次の日から避難所として解放しました。8月に避難所としての役割を終えるまで、最も多い時で100名近い人がいました。



3月12日の朝、薄暗い台所に立って「前向きに行こう・・・何とかなる。みんなで今日を生きよう」と決意しました。朝、動ける人達と食事の用意、昼の時間は沢に洗濯、午後は食料探し、夕方、食事の用意と慌ただしい生活。

家から見る景色は瓦礫の山。家を失っ

た方、家族を失った方、沢山の方々と生活。電気もない、水はでない、困ることばかり。そんな生活も笑いながら過ごせたのは地域の方々の強さでした。

避難所から仮設住宅に移る日は別れの日。泣きながら、見送ったこともありましたが、今では思い出となり、会うと思い出話をします。

震災から1年を迎えた今、最も欲しいことは「笑って暮らせる生活」。そして、今、やりたいことは、たくさんの知識が不足しているため、もっと勉強して人の役に立つことを次の人につなげることもかもしれません。まだまだ支援は必要ですが、一人ひとり必要とされる支援のカチは違います。自立支援の手伝いが望ましい。

家から見る景色は何もないけど、これからみんながまた、戻ってくる日が待ち遠しい。時間はかかるかもしれないけど、この場所でみんなの帰りを待っています。

朝はくる。今日も前向きに生きよう・・・。